

不思議な玉

三 浦 秀

暖かい春の日でした。蝶々さんは本當に氣持よくお花からお花へ飛び廻つておりました。するさ、草の間に、可愛想に、お翅を傷めた蜂さんが、苦しうにしておりました。蝶々さんは、「蜂さんどうしたの」を、尋ねました。「私ね、今翅を傷めて困つております」を、蜂さんは翅をばたくもがきながら申しました。「まあそれは可愛想に、私のお背中にお乗りなさい。そしてお家へ歸つてゆつくりなほしませう」を言つてお背中を出しました。

「どうもありがたう」を蜂さんは大變喜んで蝶々さんのお背中におんぶしました。春の風が、きれいに吹いたお花の上を、そよよ吹いております。

お家へ歸つてから、親切な蝶々さんのお手あてによつて、蜂さんは、間もなく丈夫になりました。

「まあ蜂さん、早くなほつてよかつたわね」を、蝶々さんほんたうに有難う。色々お世話になりました。それからは、二人は大變仲善しになりました。

朝日がきれいに輝いた或る朝でした。蜂さんは、蝶々さんに、

「今まで随分御心配をかけました。お疲れになつたでせう。さうぞ休んで下さい。その代り、私が一生懸命働いて、あなたのお好きな蜜を、澤山花から戴いてまゐりますから」を言ひました。

蝶々さんは、「いえ、私もそんなにブラバク遊んでゐるのは嫌ひです。一緒に蜜を取りに行きませう」と言つて、毎日蝶々さんも、蜂さんも、あつちこつち働きに出かけました。

或る日、蜂さんは、「今日は、あつちの野原へ行つて見様かしら」と、まだ飛んで行つた事の無い北の野原に行つて見ました。が、そこにはお花は何も咲いておりませんでした。それでも蜂さんは、あつちこつちと、一生懸命飛びながら探しました。そこにも、蜜のあるお花は何もありません。

「あゝ今日は蝶々さんばかりの蜜で、御夕飯なのかしら。私は何も持つて行かれないですまない」と、もうある丈けの力で探し廻りましたが、矢ツ張り見付かりません。その中にお日様は、段々西の方にお入りになつて、夕方になつて、しまひました。

「あゝもう歸らなければならぬ。何も持つて行かないで、ほんまにどうし様」夢中で飛び廻つております向ふの方に、見た事もない小さい赤いお花が咲いておりました。蜂さんは、

「あゝお花があつたく。あのお花から蜜を吸つて行きませう」と大喜びで、そのお花の所へ、飛んで行きました。するさ、さうでせう。お花の中にきれいな小さい光る玉が、は入つてゐるではありませんか。

「まあきれいだ事。蝶々さんに、見せて上げませう」とその玉を持つて、蜂さんは急いでお家の方へ飛んで行きました。お家の近くまで来るさ、蝶々さんは、お手々をあげて待つてゐました。

「蜂さんどうしてこんなにおそくなつたの？私ね随分心配したわよ。道でも間違へたの？」ほんまにおそくなつて御免なさい。今日は何も蜜が見付からなかつたの。それで今迄一生懸命探してゐたの」「まあこんなにおそく迄。蜜は私が澤山取つて来たから大丈夫よ。さあお家へ行つて御飯を食へませう。」

蝶々さんさ、蜂さんは仲善く今日一日のお話をしながら、御飯を頂きました。そうして蜂さ

んは、その美しい玉を蝶々さんに見せました。

「まあきれいな玉ね。大切にして置ませう」ミ蝶々さんミ蜂さんは、色々考へた上、一番大切な箱の中にそうつミ玉をしまつて置きました。

次の日、二人は又せつせミ働きに出かけました。夕方歸つて来て、「あの玉はぎょうしてゐるかしら」ミ蝶々さんはそうつミ、箱のふたを開けて見ますミ、ミても好い香りがして來ました。よく見て見ますミ、ミてもおしい相な蜜が箱の中に、一杯入つておりました。蝶々さんは、すっかり驚いて

「蜂さんく來て御覽なさい」「なあに蝶々さん」ミ蜂さんは飛んで來ました。箱の中には、蜜が一杯になつて真中に小さな玉がキラ／＼光つて、ポツ／＼浮いてゐるのです。

「まあぎょうしたんでせう。おしい相な蜜がこんなに澤山」蜂さんも、驚いてしまひました。「きつ／＼この玉が蜜を作つて下さつたのだわ」ミ二人は大喜びです。翌朝二人はこの玉をきれいに拭いて別の箱に入れておきました。夕方歸つて來て、又蝶々さんが玉のは入つた箱を開けて見ますミ、まあ驚いた事、又昨日の様に箱の中に、おしい蜜が一杯入つてゐるのです。それから玉の入つてゐる箱には、いつもおしい蜜が一杯になつてゐるのです。

暖かい春も、やがて暑い夏に變り、そして涼しい秋が訪れて來ました。多勢のお友達ミ蝶々さんも、蜂さんも、冬のお仕度ミに、一生懸命でした。仲の善い二人の蝶々さんミ、蜂さんも、いよくお別れの日が、近付いて來ました。

「蜂さん、今年の春は、本當に面白かつたわね」「え、でももうお別れしなければならぬのね。淋しいわ。來年の春には又きつミ、仲の善いお友達になりませうね」ミ、蜂さんは言ひました。

さて、いよくお別れの日がまゐりました。

「きょう／＼お別れですね。あの澤山の蜜を二人で分けてお土産にお家に持つて行きませう。」

ミ、二人は仲善く半分に分けました。でも、あのお寶の玉は二つに分ける事は出来ませんでした。するミ蜂さんが、

「この玉はあなたに助けて戴いた御禮にお上げします。さうぞ大切に持つてゐて下さい。私はこんなに、澤山蜜を頂けば、外に何もいりません」ミ、言ひました。蝶々さんは、

「いゝえ、これは蜂さんが見付けたのですから、あなたの物です。さうぞあなたのお寶にして大切に持つてゐて下さい。私はこんなに蜜を頂けば外に何もいりません」ミ言つて、受け取りません。二人は全く困つてしまひました。

暫くして、蜂さんが、「この玉は、あの小さいお花が下さつたのですから、あのお花にお返ししたらさうでせう」ミ、言ひました。これを聞いた蝶々さんは、

「そう、それがいゝ、二人で北の野原へ飛んで行きました。小さい赤いお花は、何よりもつゞ、美しく咲いておりました。

「赤いお花さん、ほんに長い間有難う。この玉をお返しにまゐりました」ミ、言つてお花の中に入れ様としますミ、まあ驚くではありませんか。お花の中には前と同じ、小さいきれいな玉が、入つてゐるのでした。蜂さんも蝶々さんも、「ア、同じ玉が」ミ、ちつと見つめて居りますミ、玉はお花の中からピョーンと飛び出して、二人の足もミに落ちました。蝶々さんも蜂さんも、前よりもつゞ驚きました。

「これはきつとお花さんが私たちに下さつたのだわ。お花さんさうも有難う」ミ、言つて二人は、その玉を一つづつ分けて仲善くお家に歸りました。

(終り)